

## 第70回 大阪府青少年読書感想文コンクール

### 中学校の部 特選

◇夢への選択 関西創価中3年 目崎心海（ここみ）さん

「千津さんは、夢を変えることが怖くなかったの」

私がこの本を読み始め、最初を感じたことだった。

中高一貫校に通う私は、この夏、高校でのコース選択に頭を悩ませていた。幼い頃から建築士になるという夢を抱いてきたが、今年に入り、海外の大学に興味をもってしまったのだ。きっかけは、世界を旅するテレビ番組。遠く離れた異国で暮らす人々の笑顔に惹（ひ）きつけられた。「会いたい。話してみたい、そのために外国で学びたい」。しかし、海外大学への選択は、建築士への道から逸（そ）れることとなる。私は今まで、幼い頃からの夢を追い求め実現させることをかっこいいと思っていた。例えばプロ野球選手だったり、オリンピック選手だったり、一つの夢に向かって挑戦する姿が私の理想であり、憧れだった。だからこそ、長年抱いていた夢から逸れていくことに不安を感じていた。

そんな時、担任の先生に勧められたことでこの本と出会う。それは、社会起業家、仲本千津さんの生き方を綴（つづ）った一冊であった。

本を開いて、まず目に飛び込んできたのはバッグ工房で働くアフリカ女性と、床から天井まで積まれた色鮮やかなアフリカプリントの写真。今にも聞こえてきそうなミシンの音や、生き生きと働く女性たちの姿に心を奪われた。仲本千津さんは、アフリカ・ウガンダでバッグ工房を立ち上げて、アフリカ女性を支援している社会起業家である。ウガンダでは産業が育っておらず、生計を立てられる働き口はほとんどない。また、シングルマザーが多く、子どもが学校に行けないため、どんどん社会は不安定になっていく。千津さんは、この社会問題を解決すべく、現地の女性を雇い現地の布を使ったバッグを作ることで安定して働くことのできる場所としてバッグ工房の事業を立ち上げたのだ。このように、「社会の抱える問題をビジネスを通して解決する人」を社会起業家とすることを私は初めて知った。

しかし、この本は、社会起業家としての千津さんを伝えるためだけの本ではなかった。千津さんは、最初からバッグ作りをしたいという夢があったわけでも、社会起業家になりたいと思っていたわけでもない。幼い頃の「国境なき医師団に入りたい」という思いから始まり、国連職員、民族紛争の研究者へと形を変えていく。そして、大学院で出会った起業家の「頭で考えているだけでは何も変わらない、まずは社会に出てみないと。」との一言から大手銀行へと就職する。だが、その二年後に起きた東日本大震災をきっかけに、「やりたいことを先延ばしにしない。」と決意し、アフリカへと旅立つ事となる。千津さんは、なりたいた自分を追い求めていく過程で、「アフリカの貧困を解決する事業を立ち上げたい」という夢を抱いていった。迷い、遠回りしながらも自分の信じる道を歩み続け、今の職業へと辿（たど）り着いた千津さんの生き方に、私はのめり込んでいった。

私の理想とは全く違う生き方をする千津さんに、衝撃を受けたとともに、自分の気持ちに正直に生きる姿を素敵（すてき）に思った。一つのことを追い求めるのはかっこいい。しかし、千津さんのように、なりたいた自分を探し、追い求めていくのも素敵ではないか。千津さんを素敵に思ったのには理由がある。それは、どれだけ夢の形は変わっても、その先々で全力を尽くしているということ。だからこそ、たくさんの経験を武器にして、現地のさまざまな課題に向き合い、事業を通して解決している。写真に写るアフリカ女性の姿に、貧困を嘆く様子は感じられない。むしろ、自分の人生を歩んで行く力強さを感じた。今もなお、「こんなことがやりたい」と挑戦を続ける千津さんがかっこいいと思った。

この読書体験を通して私は、どれだけ夢を変えてもいいのだと、寄り道をしたからこそ見える景色だってあるのだと気付かされた。海外大学に進学したあと、建築資格を取るための大学に入り直したって良い。夢に向かう過程において、選択できる機会は一回きりでは無いのだから。

大切なのは、「やりたい」という好奇心と全てのことに全力を尽くすこと。その時その時を大切にしていれば、いつかありたい自分に辿り着ける。そう思うと、「決めなければならない」という焦りが、未来への期待に変わっていくのを感じた。

まだ、中学生の私は、これからたくさんの選択をする機会があり、その度に悩むだろう。でも千津さんのように、こうありたいを大切にいつだって突き進んでいきたい。

(「アフリカで、バッグの会社はじめました」江口絵理／さ・え・ら書房)